

エピソード81

子どもが「眠い、お腹すいた」
と言って登校してきます



このエピソードでは、教職
経験27年目の40代男性の
先生の経験を紹介します。

なみちゃん

小学校教師として25年以上の経験
があります。

私は、特別支援学級の担任をしています。その時に出会った純希くんとお母さんのこととお話します。

純希くんは、3年生で発達障害の診断を受けていました。そして、あとでわかったのですが睡眠障害でもありました。アニメやゲーム等、2時間以上行って、途中でやめられません。勉強は短時間で気がのった時に行います。できないと癩癢や暴れて放棄するという特徴があるお子さんです。

お父さんは純希くんが幼少期に病死し、お母さんがはたらきながら子育てをしていました。お母さんの両親は遠方で、亡くなったお父さんの両親とも年数回ほど会う程度で、一人で子育てをして、仕事も忙しく疲れ切っている様子でした。怒って、言う事をきかせるという状況です。

私が、担任してまもなく、朝食をとらず、お母さんに怒られながら登校。前日も就寝は夜中の2時。「眠い。お腹すいた。」と不機嫌でした。その後は、暴れることも多く、安全を第一に、保健室で休ませることにしました。起きた後は、機嫌がよく落ち着いていました。管理職に相談し、給食を少し早く食べました。

放課後、様子を知ったお母さんから電話がありました。「睡眠障害だって知ってて、寝かせたんですか?! 学校でそんなに寝たら家で寝られなくなるじゃないですか! 学校では普通学級でも給食を早く食べることがあるんです! 特別扱いしないでください!」

私は、びっくりしました。睡眠障害のことは、引継ぎにもありませんでした。親御さんからも聞かされていませんでした。お母さんは、特別支援教育をどのように考えているんだろうか…と思いました。

私は、まずは、寝不足・空腹だと、安全面が守れないこと。活動にも身がはいらないこと。その為、安全第一に寝かせた事…を、お母さんに理解して欲しかったのです。

でも、お母さんは、「勝手に寝かせて！家で寝なくて大変なのに！先生はうちの子のことをわかってくれない！」という思いだったのではないだろうか…。

その後、私は睡眠障害のことを調べて、寝るとしても20分程度とし、1時間目は体内時計を整える為、朝は外を散歩することにしました。お母さんの了解を得て、医師からアドバイスをもらいました。

そして、連絡帳や電話で様子を伝えていきました。すると、今度は「勉強は進んでいるんですか？」と。まずは、心と身体を整えて、本人の良さを認めつつ、学習の力をつけたいことを伝えていきました。

ある日、発達支援センターの相談員から、純希くんのお母さんから学校にうまく自分の気持ちが話せないので、仲介を頼まれた。と連絡がありました。

私は、そこまで思い詰めていたのか。という思いと担任には任せられないという気持ちを突き付けられた気がしました。

その後、定期的に放課後ディサービスの担当の方も含めて、
ケース会議を行い、状況を共有することになりました。

第3者が介入という事で、母も教師も少しずつ安心することができていったのではないかと思います。お母さんは、対学校（担任）だけでは息苦しかったのではないのでしょうか。また、教師も、とても救われた。相談員が中立の立場をとりながら、学校のことをよく知っている人だったということもあり、お母さんと教師の両方にとっても寄り添ってくれました。そして、何より、純希くんのできること、できる方法を考えながら、学校、家庭、その他でできることを導きつつ、次にも繋げていってくれました。



なみちゃんの一言

- この先生は、1年間で担任を代わったそうです。その後、純希くんは転校していった。転校後、母と再会した時には「先生にはお世話になったので、手紙を書こうと思っていたんです。でも、会えたからよかった。」と言っていたのだということです。
- 先生に感謝の気持ちをもっている保護者さんでも、それを伝えることは、タイミングをつかむのが難しい方がいます。そのような保護者さんの様子を理解できるといいですね。

お・し・ま・い



なみちゃん

ナレーション 浪岡美保
(北海道教育大学大学院 修了生)

イラスト 尾上樹里
(北海道教育大学 大学院生)